

# 家にまつられる神々

平成11年3月30日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430) 1111

家の神々は、屋内にまつられる神と、屋外、屋敷地内の一隅にまつられる屋敷神など、大別することができます。ここでは、屋内神を中心にみてみましょう。家のなかの神としては、大神宮、荒神、恵比須・大黒などが、もっともひろくまつられている神々です。また、正月の間に限って、歳神（年神）をまつることも、行われてきました。

## 1 大神宮

一般に、神棚といえ、大神宮をまつる棚をさすことが多いようです。この神棚には、伊勢大神宮（天照皇大神宮）のほか、それぞれの地域の神社の神々も一緒にまつられています。

家の間取りによって、いくらか違ってはいますが、おおかたの家では、ザシキとよばれる部屋の鴨居の上に板棚を設け、木造の小さなお宮を据えて、大神宮の神札を納め、家ごとのしきたりによって、鎮守様の神札をはじめ、さまざまな神社の神札をもまつっています。

このような神棚は、先祖をまつる仏壇とともに、日常の暮らしの中でも、神仏をあがめる家のなかでの、よりどころになってきました。神棚や仏壇が、ひろく庶民の家にも設けられるようになったのは、江戸時代になってからといわれています。

## 2 恵比須・大黒

恵比須も大黒も、ともに七福神の一つとして親しまれている福の神です。多くの家々では、カッテの隅の方に、恵比須・大黒をまつっていました。戸棚の中に、まつっていた家もあります。この福神の像も、近年では、家の新築や改築によって、ザシキの神棚に、移すことも行われています。この一対の神は、はたらき神としてあがめられ、いつも一組でまつられてきました。この二神をエビス様とよぶことも多いようです。

一年に二回、正月20日と10月20日（または、月おくれの11月20日）には、エビス講、エベス講、オイベス様などといって、家によっては恵比須・大黒を神棚の下などに置いた机の上に移し、供え物をします。お明かりとお神酒をあげ、尾頭つきの魚、お高盛りにした小豆飯か白い御飯、あるいはソバ（うどん）などを、お膳にのせて供えます。魚はタイなら上等ですが、ふつうサバとかサシマとかが使われてきました。その魚は、「抱きあわせにして」二尾つけるものだといひます。エビス様は欲深なので、できるだけ量は多いほうがよく、御飯などはお高盛りにするのだと伝える人もあります。このときの膳の使い方は、エビス膳といひ、日常の暮らしでは避ける、木目が縦になる置き方にします。葉付きの大根二本とか、葉付きの二股大根とかを供える家もありました。

エビス様は働き者なので、エビス講の日には、一升枡の中にお金を入れて、お金をふやしてくださいと、お願いするのだといひます。財布ごと入れることもあります。こうすると、小遣いに不自由しないともいわれていました。子どもが小遣いを入れたがま口を枡の中に入れておくと、こっそりふやしておいたという人もいます。

1月20日の初エビスに、エビス様は働きに出て、10月20日（月おくれでは11月20日）には帰ってきなされるので、秋のエビス講だけは、ていねいにやるのだという家もありました。また、ふだん、エビス様にはご馳走らしいご馳走をしたことがないから、荒神様などみんな出雲に行って留守のときに、ご馳走をあげるのだともいひます。「秋は百姓のエビス講」だといひ、11月にだけ、エビス講をやっているという家もあります。

エビス様に供えたものは、家によって、女の子には食べさせてはいけない、ひげが生えるからといひられていました。なお、恵比須・大黒を、カッテにまつるのは、やりくりをするのに、女は、けちでなければいけないので、この神様が、よく見守っているのだという言い伝えも聞かれます。

## 3 荒神様

家にまつる神のなかで、もっとも身近に生活とかかわり、さまざまなはたらきをもち、数多くの言い伝えを残しているのが、荒神様のようです。荒神は、正しくは三宝荒神といひ、火の神としてあがめられてきました。カマド神様といわれ、オカマ様ともよばれています。

おおかたの家々では、ダイドコロとよぶ土間の奥に据えられたカマドの後ろの壁に、小さな棚を設けて、荒神様をまつっていました。近年では、家の改築や新築に伴って、カッテの隅の方に、この棚を移した家が少なくありません。

荒神棚には、三宝荒神なので幣束を三本あげるものだといひ、正月のオスワリ（供え餅）も三組あげる家もありますが、家ごとのしきたりによって、幣束を二本または一本だけあげる家もみられます。荒神様には、かならずトリのガク（鶏の絵馬）をあげるという家もあって、毎年、暮れになると、調布の天神様の歳の市とか、溝ノ口（川崎市）の甲州屋などで、新しく買いもとめます。荒神様のお使いとされる鶏を描いた絵馬には、鶏が左を向いたものと右向きとの二種類があり、家の構えによって絵馬をえらびます。一般に多い左住まい（主屋に向かって左に部屋があり、右は土間と入り口になっている住まい）の家では、左向きの鶏の絵馬を、その逆の右住まいでは右向きのもを、「いいことが、すーっと入ってくるように」と、荒神棚にあげておきます。また、オカマのコシカケとって、屋敷のシイの木とか梅の木などに生えたという大きなキノコ（サルノコシカケ）を、あげておく家もみられます。

火の神、火伏せの神といわれる荒神様は、子どもの守り神ともされてきました。幼い子どもにみられる尻の青あざは、その子が生まれるときに、早く出るようにと荒神様が尻をつねったのだという言い伝えもあります。子どもが夜泣きをするときなどには、半紙に鳥居の絵をかいたものを荒神様の棚に貼って、治るようお願いしたものでした。また、子どもがいろりなどに落ちたときには、荒神様がボンクボの髪の毛をつまんで引っぱり上げてくれるといわれていました。荒神様は女神様なので、あったかい物ができたら何でも供えるものだという人もあります。そまつにすると、とても怖い神で、子どもがやけどをしたり、けがをしたりするといわれていました。

荒神様は、10月30日（または31日、9月晦日の月おくれ）の夜、オカマ風に乗って（あるいは馬に乗って）縁結びの相談をしに出雲へ旅立たれ、ひと月後の11月30日にお帰りになります。おたちの日には、お明かり、お神酒、36個のだんごなどを供え、家によっては荒神松（枝が三本に分かれた松）もそえてあげます。オカマのだんご、おたちのだんご、子育てだんごなどもよばれる、おみやげだんごを供えるのは、荒神様には子どもが36人いるからだといわれています。11月15日は、荒神様の中帰り、お留守見舞いなどといって、荒神様が家の様子を見に一日だけ帰られるので、ハツ頭などを供える家もあります。11月30日のお帰りに、荒神松をとりかえて、小豆飯（または小豆粥）などを供える家、また、この日もだんごをつくる家もありました。

荒神様は縁結びの神なので、お嫁に行く先を、ここへ行けとか、さしずしてくださるので、娘のいる家では、良縁に恵まれるように、日ごろから、よくお願いしておくものだといわれます。荒神様に供えたものを、女の子が食べると縁遠くなる、出戻りになるということも聞かれます。

火伏せの神の荒神様が出雲へ行かれて留守の間は、とくに火の元に気をつけるものでした。冬至の日の朝に初氷をくんで、瓶や徳利などに入れ、荒神様に供えておくと、火事になったときに、消してくださるといいます。

#### 4 井戸神

井戸を使うことも、まれになった近年では、井戸神様にあげていた正月の幣束を、台所の流し、水道の蛇口近くに立てるといふ家が少なくありません。水をつかさどる神である水神は、水道が普及する以前には、井戸や洗い場などに、幣束を立てて、まつられていました。井戸にまつられる水神、井戸神様は、日常の暮らしでは目を守る神としての言い伝えもあります。ものもらいができたときに、治してくれるようお願いするまじないは、よく知られています。また、節分の豆の幾粒かを井戸に入れてお願いすると目を患わないとか、井戸に金物を落とすと目にたたるなどとも、いわれていました。

産婦は出産後、7日間（家によっては21日間）は、神様をまつる場所、神棚はもちろん、井戸やカマドにも近づいてはいけないとされていました。枕直しといわれる21日目過ぎてから、産婦が生まれた子を抱いて、井戸神様にお参りするという習わしが、かつては聞かれたといひます。子どもが家族の新しい一員となった挨拶だといわれていました。

#### 5 便所神

ふだんの暮らしの中では、便所神についての言い伝えなどは、とくに聞かれませんが、年の暮れになると、便所の入り口にも正月飾りの輪飾りをする家もあり、また、小さなオスワリをあげる家もあります。便所のことをコウカ（後架）とっていたので、コウカの神様、コウカ神様などもよばれていました。駒井のT家の例では、コウカ神様には昭和35,6年まで正月の輪飾りをしていました。いちばん汚い所の神様だから、よけいに、正月にはきれいにしなくちゃならないと、おばあさんから言われていたということです。便所神は、女神様だといわれています。

（狛江市文化財専門委員 中島恵子）